国語科教員と新聞記者の協同授業実践とその可能性

札埜　和男
（京都教育大学附属高等学校）

The practice and possibility of cooperation lessons by Japanese teacher and newspaperman

Kazuo FUDANO

2016年11月30日受理

抄録：2012年3月28日に京都教育大学と京都新聞社は「新聞を活用した教育推進に関する協定」を結んだ。それを契機に筆者はその協定を生かして、京都新聞社の塚本宏氏と毎年さまざまなテーマで、国語科の授業を協同で実践してきた。テーマは新聞作成・インタビューの方法・文章の書き方・メディアリテラシー・学ぶことなど多岐にわたる。ここではその協同授業の実践の成果をまとめ、教員と新聞記者による協同授業の可能性について考える。

キーワード：国語科、新聞記者、塚本宏、協同授業

Ⅰ．はじめに（実践の契機）

はじめに協同実践を行うようになった契機について記す。

1.「新聞を活用した教育推進に関する協定」の締結

2012年3月28日に京都教育大学と京都新聞社の間で「新聞を活用した教育推進に関する協定」が結ばれた。目的は教員研修や学生、生徒、児童らへの教育を通じて言語活動の充実やコミュニケーション能力の向上、マスメディア研究での協力である。これによって大学や附属学校に京都新聞記者を派遣し授業を行ったり、講義や授業で京都新聞記事を手続きなしで使用できる、といった教育活動が円滑にできるようになった。

2. 協同実践者・塚本宏氏

筆者はこの協定を利用して2012年より毎年、京都新聞社のある一人の記者（部署によっては「社員」と称す方が適切な場合もあろうが、本稿ではこのように称す）と国語科で協同授業を行ってきた。その記者とは京都新聞社の塚本宏氏である。

塚本氏の略歴だが、兵庫県出身で立命館大学法学部卒業後1989年に京都新聞社に入社した。洛西総局・社会部・南丹支局長・ニュース編集部部長代理・運動部部長を経て現在写真部部長を務める。社会部時代に起きた阪神・淡路大震災では1年間にわたり取材を続け、現地で書いた連載「生きる」で新聞協会賞を受賞した。

塚本氏との協同授業のテーマはその都度さまざまであり、ある単元の授業の中で組み込む形で行ってきた。塚本氏との協同授業の内容をまとめるとともに、教育現場で新聞記者との協同授業はどのような可能性を拓くことができるのか、またそれを可能にする条件について述べてみたい。

Ⅱ．実践の経緯

ここでは、2012年度から2016年度まで行ってきた協同授業をまとめる。その一覧が表1になる。来校回数は13回、実施時間数は20時間、対象学年は1年から3年まで全て、科目数は3教科、授業内容は5パターンになる。

表1　協同授業の実践一覧

回	実施年月日・時限	対象	内容	新聞掲載日
1	2012年6月26日⑥	2年「古典講読」受講者	新聞の作り方	2012年6月27日「方丈記の一節に見出し」
2	2012年9月25日⑥	2年「古典講読」受講者	作成した新聞の講評	
3	2012年10月4日①	2年「古典講読」受講者	作成した新聞の講評	
4	2012年12月18日③④	1年「現代文」	インタビューの方法	2012年12月19日「インタビュー手法学ぶ」
5	2013年7月2日④	3年「現代文」	メディア・リテラシーについて	2013年7月3日「メディアへの理解深める」
6	2013年7月3日④	3年「現代文」	メディア・リテラシーについて	
7	2013年11月7日②	1年「現代文」	インタビューの方法	2013年11月8日「インタビュー技術学ぶ」
8	2013年11月11日⑥	1年「現代文」	インタビューの方法	
9	2014年12月3日③④⑤	3年「現代文」	「学ぶ」ことについて	2014年12月4日「なぜ学ぶのか」意義考える
10	2015年6月30日①②	3年「国語表現」	「書く」ことについて（文章作成法）	2015年7月1日「書き手の『顔』見える文章を」
11	2015年12月14日⑤⑥⑦	2年「現代文」	インタビューの方法	2015年12月15日「インタビュー手法学ぶ」
12	2017年2月1日⑦2日③⑤	2年「現代文」	メディア・リテラシーについて	2017年2月3日「情報うのみにしないで」

Ⅲ．実践の内容

1. 新聞の作り方

この授業は「古典講読」の時間に行った。鴨長明の『方丈記』に京都を襲った「大地震（おおなゐ）」について記述した箇所があり、京都教育大学で地震学の研究をされている谷口慶祐氏と一緒に読み解く実践を行った。その後江戸時代に浅間山の噴火や摂津（大阪）を襲った津波の瓦版を教材に使って、当時の人々がどのように災害を伝えたのか学ぶ授業を展開した。そして夏休みの課題として『方丈記』に描かれている「大地震」について、（鎌倉時代に瓦版があったと仮定して）古語を適宜使いながら瓦版を創るという課題を出した。その準備として

新聞の作り方について、1学期に授業を依頼したのである。塚本氏は当時の瓦版と現在の新聞の紙面づくりの違いについて触れながら、新聞の見出しのつけ方（例えば見出しは8文字から10文字が一目でわかりやすいことなど）や紙面構成の基本を説明された。授業ではそれを受けて『方丈記』にある武士である父親が地震で土塀の下敷きになって亡くなった我が子を嘆く記述箇所（「その中にある武者，ひとり子の六，七ばかりに侍りしが，ついぢのおほいの下に小家をつくりて，はかなげなるあどなし事をしてあそび侍りしが，俄にくずれ，埋められて，あとかたなく，平にうちひさがれて，二つ目など，一寸ばかり，うち出されたるを，父母，かかへて声を惜しまず悲しみあひて待りしこそ，哀れに悲しく見侍りしか。子のかなしみには，猛き者も，恥を忘れけりとおぼえて，いとほしく，ことわりかなとぞ見侍りし」）をもとに見出しをつける練習をした。「武士の目にも涙」「地震被害子にまで」といった作品があった。

1学期はスケジュールが合わず1講座だけであったが、2学期は2講座対象に提出された課題の講評をしてもらった。塚本氏は新聞名のつけ方、意欲、内容の観点から目についた作品を挙げて講評された。新聞名のつけ方では「毎回、現在から時代を遡り、その時ありし様々なる出来事をスクープす、『タイムハンター新聞』」の書き出しで始まる「Time Hunter新聞」を取り上げ、古典の新聞であるにも関わらず、あえて横文字にした点を評価された。またレイアウトに工夫はなくても、地震の現状だけでなく行方不明者の多さへの心情、現代の原子力への批判、昔と今（現代）の地震の違い、執筆者の考えを書き込んだ作品を評価された。書かずにはいられないその意欲を買われたのである。文字はきれいとまでは言えなくとも、地震について祖父にインタビューした作品も紹介された。「われ御祖父、京都府綴喜郡井手町に昔より住みたり。御祖父に『地震』のこと尋ねける。御祖父答へて曰く『あな、今は昔、奈良盆地東縦断層帯にて地震ふること侍りけむ。にはかに家は崩れ、物埋められて、村家、小屋崩れ出火しける・・・』」と実際に取材したことを伝えようと記事化した点を褒められたのである。

この一連の授業を通じて生徒らは、新聞の見出しやレイアウトといった基本的な作り方はもちろんのこと、その表現が現代語であるか古語をであるかを問わず、読み手を引き付ける工夫や意欲の重要性を学んだのであった。

2. インタビューの方法

塚本氏には3回にわたりインタビューの方法実習のために来校してもらっている。これには1年生あるいは2年生の「現代文」で「自分の興味関心ある職業人に自ら交渉して連絡を取り、インタビューを実施してそのかたの人生観や職業観を明らかにして一人称で書き上げる」という課題を出すという背景がある。

課題の趣旨説明の後、過去の優れたインタビュー作品を分析し、3人一組でインタビュー練習を行い（インタビュアー、インタビュイー、オブザーバーの役割を全て体験する）、その気づきを共有する。その後に塚本氏を招いてインタビュー実習を行うのである。

授業の方法は生徒が1名あるいは2名ほど何組か出てインタビューを行い、共有する場合（2012年、2015年）もあれば、手本を示すために筆者が塚本氏にインタビューする場合（2013年）もある（前者の場合は、「生徒の質問にわざとあまりしゃべりすぎないようにすること、インタビュー後に生徒の良かった点と悪かった点の講評を行うこと、塚本氏のインタビュー論を伝えることの3点を依頼しておく）。

生徒がインタビューを行う場合、得てして生徒は準備してきた通りの順番でインタビューする傾向が強い。予想していた答えが返ってこなかったり、沈黙があったりするとパニックになってしまう。インタビューする際にうまくいかず本当にその場で頭を抱えてしまう生徒もいる。どちらの方法で授業を進めても、塚本氏からはインタビューを生業とする新聞記者として体験に基づく助言やエピソードを語ってもらう。中でも必ず語ってもらうようにしているのは、阪神・淡路大震災の時の取材エピソードである。塚本氏は地震の被害がまだ収まらない頃、デスクから「神戸市長田区で焼け野原で再開した工場があるらしい。そこへ行って、皆がまだ苦しんでいる中で、一人だけ工場を再開して心苦しくないか、聴いて来い」と命令される。塚本氏は後輩の社員を連れて悩みながら

もその工場に向かう。着いていきなり「工場再開してしんどくないですか」と聞きかけた後輩社員の足を蹴って黙らせてから、塚本氏は本題とは違うとりとめもない質問や雑談を続ける。そしてインタビューを終えて帰り際、神戸の惨状が見渡せるその会社の窓を見ながら「よう見えますな」と社長に一言。すると社長は「工場で扱ってるこの砂糖が食いもんやったらなあ」と拳を握りしめて涙を流し始めた。それを見て塚本氏は「社長、もう少し話を聴かせてくれへんか・・・」と声をかけたのであった。社長にインタビューする前に、会社の窓から地震後の神戸の光景が見えたことから思いついたという。そして「その人からしか聴き出せないことを聴き出せたら、かつ自分にしか聴き出せないことを聴き出せたら、そのインタビューは成功だ」と締め括られる。この塚本氏のエピソードに心打たれ涙を流す生徒もおり、生徒はインタビューの素晴らしさや奥深さを実感するのである。

感想作品から生徒は塚本氏とのインタビュー授業より主に4つのことを学んでいることがわかる。一つずつ挙げながらそれを示す感想を示していこう。第一はマナーである。

・座るタイミングで先生がすっと座ったのに対して塚本さんは、「座っていいですか」と聞いていた。私達の場合も相手のかたは目上にあたり、何も言わずに座ってしまうのは失礼だと思うので、実際にインタビューするときは「どうぞお座り下さい」と言うべきだと思った。

第二はスキルである。これは授業の目的からも当然のことであるが、その学びは多岐にわたる。

・相手の言葉を軸にインタビューの会話を発展させてゆくことが大切だとわかった。１つの話題から多岐に渡り様々な情報を引き出すことが、話し方により可能だとわかった。
・始めの出だしが一番大事だと思った。相手が自分にどれだけ心を開いてくれるかによって、インタビューの進み具合が大きく変わる。相手の話からこれから話を広げていくことができそうなキーワードを聴き取り質問することが大事だと思った。
・テンポに気をつけようと思った。話しやすい距離感、態度、質問をうまくつくりだしていくことで、インタビュイーの人にも気持ちよく答えて頂けるのでは、と思う。
・始めにインタビュー全体の流れについて。想像していたよりテンポよく笑いも混じりながら進んでいったことに驚いた。構成としては前振り→中身→終わりの雑談、のような感じであったが、前振りの仕様によってはインタビューの流れがとても明るくなると知った。中身の中心部分では適度に前の質問から流れを作りつつ、話題を変えていくことが非常に難しく感じられたとともに、先生のそのスキルがどれほどのものか分かった。実際に自分がインタビューするときは、今回のように前の質問→少々の雑談→次の質問への連結点をつくること→次の質問、という流れで実践したいと思う。自分がインタビューしたいのは、研究者なので、コントのようにはできないかもしれないが、最近の研究などの話題を出して、自分との共通点を見つけ出し、会話を発展させたい。

第三は「心構え」である。スキルだけでなくインタビューにおける精神面についても学んでいることがわかる。

・イメージで固めない、という言葉が心に残った。
・「1、2行のために何日もかける、そういう時こそ真価が問われる」。これは塚本さんの経験の積み重ねが言っているのだと思いました。
・「取材の時に人への思いを巡らすことはした」という言葉から、人の立場に立って行動されていて、本当に心優しくすごいと感じました。今日、印象に残っているのは、阪神大震災の時の工場での取材内容です。初

めに本当に聴き出したいことを聴くために、1時間も他の話をして、帰る時にぽそっと吐いた呟きで相手の本音を聴き出す方法にはとても驚きました。ふとした瞬間にポロッと出る本音を聞き逃さないようにするのが大切だと思いました。

第四は「職業観や人生観」である。インタビューを通じて塚本氏の持つ仕事や人生への考えを汲み取っている。

・16才の時の話をして頂き、バイトをすることが塚本さんにとっていい経験になったんだと思い、大学をそんなふうにスパッと辞められる勇気が素敵だと思いました。でも1回くらい失敗しておかないと自分が失敗した時に対処できないから、失敗も大切だと思った。大学を辞めたことさえも良い経験にすることは素晴らしいです。
・私が塚本さんの話で一番驚いたことは、国語の成績のお話です。私もインタビュアーの方はみんなメチャ国語ができて、文章を作るのが上手い人だと思っていました。国語の成績が悪い理由は、人と同じ視点を持ちたくないということでした。さらに大学を1年で辞めて1年浪人してまた別の大学に入学していることから、とても自分をしっかり持っていて、思った道を進んできたのだなあ、すごいなあと思いました。また取材といっても、自分の好きなものだけでなく、行きたくない所も仕事として行かなくてはならないのがあると聞いて、相手を怒らせながら泣かせながらも本当のインタビュイーが言いたいことをしっかり最後まで聴く、それが本当に辛いなあと思いました。やはりどんな仕事でも楽しいことばかりではいられないのだと実感しました。
・今日塚本さんの話を聴いて、塚本さんは視野が広く人の心に寄り添える優しい方だと感じました。人間愛についての話の時「目の前の人を助けられても、自分は1人だから遠くにいる人は救えない。だから法律ならたくさんの人を不幸から救える」とおっしゃっていたからです。本当にその通りだと思いました。また「やらないよりやるほうが良い。自分にできることを探そうと思った」とおっしゃっていて、素晴らしいなと思います。

3. メディア・リテラシーについて

教科書所収の評論文である、菅谷明子『メディア・リテラシー』の一部を学習してから、実際にメディアの現場におられるゲストとして、ＮＰＯ法人「イラクの子どもを救う会」代表で戦場ジャーナリストの西谷文和氏注１）をまずお呼びして、後に塚本氏を招いた。西谷氏は主にイラクやアフガニスタン、シリアなどに入って自ら撮影した映像をもとに説明された。その話の中で、こういった戦場の映像はゴールデンタイムに放送されないことや、広告主がメディアに与える影響について述べられた。西谷氏の授業を見学された塚本氏は、西谷氏の主張を新聞メディアに携わる立場から否定的に捉えて反論する形で説かれた。その際、生徒の代表数名がメディア・リテラシーに関する疑問点を塚本氏にインタビューする形で聴き出す方法を取った。感想を読むと、生徒は塚本氏の話を聴くことで、西谷氏の話を相対化させていることがわかる。戦争の現場体験を持つ西谷氏の話にどうしても生徒はひきずられてしまいがちなのだが、塚本氏の話はそれを引き戻し、バランスよく考える方向に軌道を変える働きをしているといえる。たとえば次のような感想である（以下の作品は2013年実施の授業による。2017年も同様にお二人を招いたが、授業の形式として、塚本氏への生徒のインタビューは行っていない）。

・多くの人が西谷さんが伝えたことを信じ感化されたと思いますが、塚本さんは西谷さんが言っていたことを全てその通りでないとおっしゃっていて、確かにその通りだと思いました。西谷さんは自由シリア軍側の立場でしか取材していないし、自由シリア軍がいかにも被害者であるように伝えられましたが、自由シリア軍

も兵器を使用しているのだから、政府軍にも被害は出ているはずなので、政府軍寄りの話も聴いて自分がどう思うのかや、どちらの立場につくのかなどを決めるべきだと思いました。

・今回の話を聴いて、世の中で起こっているいろいろなことは二極化して考えがちであることを実感した。例えば前回話して下さった西谷さんの映像は、政府軍がこんなにもひどいことをした、という映像だったが、政府軍＝悪、自由シリア軍＝善、と捉えそうになるが、実際に自由シリア軍も軍と名乗っているなら戦闘をしているはずなのだから、その映像を見ずに善悪を判断するのはメディア・リテラシーに反する。

・私が西谷さんの話を聴いて疑問に感じていたことを、今回塚本さんの話で解消されました。それは全てがイラクでいいのか？ということでした。確かにイラクや中東の内戦についても私たちは知っておかねばならないと思いましたが、その前に日本の問題はどうなるんだろうと思ってしまったのです。イラクやシリアの情報が入ってこないのはここが日本だからで、その情報を必要としている人が少ないからだと思います。また利益が発生するかしないか、メディアを伝える側が人間であるとしっかり認識しなければなりません。伝えない情報があるのも、伝えている側が人であるからだと思うのです。

・塚本さんのお話を聴いて、自分の考えがいかに偏っているかがわかりました。1年生の時に模擬裁判に参加した際に山田悦子さんという冤罪被害者（甲山事件）のお話を聴き、その際にメディアが山田さんを犯人だと決めつけたような報道をして、世間も山田さんが犯人だと思い込んでしまったとおっしゃっていた。注２）それを聴いて自分はメディアに騙されているかもしれないと思い始め、その後西谷さんのお話を聴いてますますメディアは嘘をついているのだという考えを確信しました。でも初めは私は頭ごなしにメディアを信用しないのではなく、多面的に物事を見れるようになりたいと思っていたのです。しかしいつの間にか偏った考え方に。塚本さんのおっしゃったことはもっともです。マスコミを職業とする人に、皆に嘘を教えてやろうと思ってニュースをつくるような人はいないと思うし、多くの人が塚本さんのように真実を追い求めているのだろうと思います。でも山田さんがメディアに自分が犯人であると決めつけているように感じられたのも紛れない真実です。今の私には究極の真実はわかりません。もしかすると妥協の下にしか真実は分からないこともあるかもしれません。しかし塚本さんのお話は確実に私の考えを広げてくれました。

一方、塚本氏の話を聴くことで、迷いに陥った生徒もいる。答えがないのは悩ましいことであるかもしれないが、生徒の考えを揺らす意図もあるので、これも効果とみてよいだろう。かえって明確な答えのある方が危いとも捉えられる。

・固定観念を植え付ける形で国民を扇動しやすく、ゼロか１０か白か黒かのような考え方や見方が多いということだ。塚本さんの善対悪ではない、という言葉はまさにその通りだと思った。他にインタビューの最中の常套句やきれいごとは嘘が多いというのもその通りだと思った。普段そういう言葉はよく耳にするので騙されているとかの感情さえなく、聞き流してしまうことが多く、あっさり信じてしまう。そういう言葉に慣れてしまっている私自身にも問題があるのではないだろうか。しかしだからといって全てを疑ってかかるわけにはいかない所が難しい所だ。

・塚本さんの話は西谷さんと意見が違うことが多く、とても面白かったです。でも2人がしたいことは真実を僕たちに伝えることだと思いました。お二人の話を聴いてから、テレビで見ている時に全てを疑ってしまうようになりました。そして何が正しいかもわからなくなりました。人の意見を読み取ることがとても重要だと思いつつも、それ以上に難しいことではないかと思いました。

・二つの視点から物事を考えることは経験したことがなかったので、貴重な体験で、学校の教員以外の大人の話は新鮮でした。お二人とも情報を私達に伝えようとして下さっているのがわかりました。しかしあらゆる

ものを疑っていたらひねくれ者になってしまうので、そこは臨機応変にやっていこうと思います。

また批判する方法や姿勢に気づいた生徒もいる。

・インターネットでは嘘の情報が溢れているが、新聞だけは絶対だ、と思っていました。でも塚本さんが「事実にたどり着かないこともある」と言われた通り、自分の考えを改めることができました。最近ニュースを見ても「これではこう伝えてるけど、裏にはまだ絶対何かあるぞ」と考えるのが楽しくなってきました。
・「情報を得た、とか、交流を深めた、とかそういう言葉が書かれている時はだいたい嘘だから疑ってかかった方がいい」という言葉が印象に残っている。
・私が話を聴いて変わったことは新聞の読み方です。朝日新聞の「天声人語」から読んでいましたが、よく考えるとそれは文字数のかなりの制限や、記者の私見が多かったです。私は受け入れながら少し疑っています。

中には新聞というメディアへの認識を見直す生徒もいる。新聞記者志望の生徒はよけいに興味と感銘を抱いたようである。

・新聞とかはスポンサーを一番大切にしていると思っていたので「一番裏切れないのは読者」とおっしゃっていたのが印象的でした。
・メディアを批判する話や意見をさまざまなところで聴いたことがあるが、実際に「伝える側」の人の話を聴くことはなかったので面白かった。伝える側の人もメディアを選択してほしいという意見を持っておられ意外だった。なぜならもっと読んでほしいという意見だと思っていたからだ。記者も金儲けの仕事であるために少し話を操作することもあると考えていたが、真実を知るために身を削って情報を得ていることもあるんだというお話をされて、失礼ながら驚いた。
・驚いたことは、記者が警察との関係で情報を得たり取材した人の表情から情報を得たりして、一つの記事を書くために大変な苦労をしていることでした。失礼ながら今まで私はメディアは自分の都合の良い結果を得て記事を書くことを優先し、事実にたどり着くことに全力を注いでいるイメージはあまりありませんでした。事実を追い求め続け、一行のために一週間かけたりして、それでも事実にたどり着くことは難しいと知りました
・印象的だったのは「新聞社にはいろんな意見の人がいるし、必要だ」ということです。確かによく考えてみれば、同じ考え方ばかりの人が集まっている新聞社は奇妙だけど、私には「新聞社によって考え方が全く違う」という印象があったので驚きでした。

課題であるメディア・リテラシーを越えて塚本氏の職業観に感銘を受けた生徒もいる。

・今回の授業で私が学んだこと、それは自分が目指している世界は思っているほど甘くはなかったということです。もちろん簡単な仕事とは思っていませんでしたが、毎日読んでいる新聞の一文一文が記者の汗と涙の結晶だったとは。記事になる話をしてもらうために、時間をかけて忍耐強く待ち、時には自分がしていることは間違いでないかと思ってしまうほど苦労を重ね、何度断られても水をかけられても諦めない執念を持つ、こんな話を聴いてしまっては迂闊に新聞批判なんてできないと思ったりしました。今まで憧れでしかなかった新聞記者の仕事がどれほど苦労の多い仕事かということもよくわかったのですが「自分が書いた記事で人助けができた時は今までの自分が報われたと感じた」と聴いた時は、憧れの気持ちがさらに強くなりました。

また私は大手の新聞しか取ったことがないのですが、地方紙だからこそできることがあると聴いて、地方紙に興味を持ちました。

・塚本さんらが情報をどんなふうに集めてどんなふうに選んでいるのかなどお話されるのを聴いていると、塚本さんは新聞記者という職業に責任と誇りを持っておられるし、きちんと仕事に向き合っておられるんだなあと伝わってきました。新聞記者が事実を伝えていないのを見て、自分でもっと事実を伝えたいと思って新聞記者になったお話を聴いて、すごく立派だなと思いました。私も今進路に悩んでいたりするけれど、塚本さんのように自分のやりたいことを見つけられたらいいなと感じました。自分のやりたいことであれば理想と違っても続けられるとおっしゃったので、「自分はこのことで生きてやろう」と思えるようになりたいです。

・大きく心に残ったのは、思っているほど恰好よくないということです。例えば僕の中で新聞記者のイメージは報道の最前線で働くいわゆるジャーナリストらしい姿でした。しかし話の中で僕の知らない新聞記者の取材の方法などを聴くと、意外とそんなことなくて、むしろ情報を得るために利用できるものは何でも使うというのは、人間的で現実味があるように感じられました。「たぶん、それはどの職業でも一緒、見かけほど美しくもないし恰好よくもない」という言葉は、いつも両親の働く姿を見ているだけに、僕の心にしっくりきました。

・記事を選ぶ時の基準は基本的に自分が心を動かされたもの、という言葉は心に残りました。毎日、記事の候補として持ち込まれた数えきれないネタのうち、記者が選び抜いた結果載せられた200から300の記事を、どれも丁寧に読みたいと思いました。すべての人ではなくても、たとえ10人、20人でも記事を読んで共感する人がいてくれるために記事を書く記者はかっこいいなと思いました。私が一番深く考えさえられたのは「理想と違う職業を続けるためには、このことで生きていこうと思う気持ち、好きなことを10のうちか1つは見つけにくいが、100のうちから1つは見つけやすい」という言葉でした。塚本さんの話を聴いてメディア・リテラシーや記者の仕事以上のこと、人生の考え方も学べました。

4. 学ぶということ

本校では3年生「現代文」2時間分を「総合的な学習の時間」として充てており、テーマは「学びを学ぶ」である。担当教員が各自そのテーマに沿って問題を設定して授業をすることになっている（しかしこれは2014年入学生までである）。2014年に担当した3年生の時は、ちょうどセンター試験の廃止がニュースになった時であり、中央教育審議会による入試改革答申案を扱い、一発勝負のセンター試験の是非を考えさせた。その授業の流れの中で、塚本氏には「学ぶとは何か」というテーマで、筆者がインタビューする形で語ってもらった。塚本氏は神戸市長田区の下町で生まれ、母子家庭で育ち、一人っ子であったという。高校時代は家計が苦しかったため、肉屋や甲子園の売り子などいろいろなアルバイトをした。今は新聞社に勤めているが、高校時代は国語が苦手で偏差値も低く、順位は下から数える方が早かったという。大学は推薦で京都外国語大学に進学するが中退する。亡父が残した200万円を元手に浪人生活を送り受験勉強に勤しんだが、結局国語は伸びなかったらしい。そして立命館大学法学部に進学し、ボランティアのサークルに入る。しかしサークル内でいわれる「愛」に違和感を覚え、「法」こそが人を救うと考えるようになった。さらに大学時代に取材に来た新聞記者の記事に失望し、逆に新聞記者を志すようになったという。本校のような進学校にいる生徒は、自分たちの周りにはいない存在のように感じたのか、塚本氏の生き方に考えるところがいろいろとあったようである。

・塚本さんのお話を聴いて思ったのは、いろいろな生き方というか、進み方があるんだな、ということでした。中学、高校でどのような生徒であったか、ということを聴いて驚かされましたが、そのあたりが少々滅茶苦

茶でも大学へ入ってからとか、さらにその後の身の振り方でどうにでもなるのだなあと思いました。就職してから再度大学を受けた人もいる話は、本当にそんな人もいるのかと耳を疑いそうになりました。あまり身の回りにいない進路の取り方でお話を聴けて、すごく新鮮に感じました。

・一応進路は決めたけど特に強い意志があるわけでもない私にとって、塚本さんの、外国語学部から法学部へ変更した話や、やりたいことや自分に合っていることを見つける時期は人それぞれ、ということばに励まされました。

・「人生は小説よりも奇なり」とは言うけど、やっぱり他の人の人生の話を聴くのは面白い。その話が将来役に立つかと言われればそうでないかもしれないけど、少し自分の視野が広がったかなと思った。

・自分にない考え方をたくさん持っておられる方で、とても為になるお話を聴けた。人生のどん底を見てきた人だからこそ説得力のある話で、考えさせられることが多かった。

・家庭のこととか今の仕事についてとかいろんな話をして下さって、とても聴き入りました。塚本さんの学生時代の話を聴きながら、自分が進路のことで悩んでいることを考えたりしました。話を聴いていて、塚本さんは勧めなかったけど、新聞記者という仕事に少し憧れを抱きました。塚本さんのような生き方、かっこいいなと思いました。

・巷では学歴が命だの、良い大学を出なければ良い就職はできないと言われていますが、自分がやりたいと思う仕事は、たとえ特定の教科が苦手であろうが関係ない、むしろ大切なのは人間性だなあ、と感じました。今は受験勉強で忙しいですが、時間が出来た時、塚本さんの話を思い返しながらじっくり自分を見つめ直せたらと思いました。

感想を読むと、塚本氏は生徒からみれば、価値観の異なる「異邦人」のように映ったように思われる。しかしその分、自分たちにない魅力を感じ、刺激を受けたのであろう。

5. 書くということ

3年生「国語表現」は選択科目であり、選択する生徒の多くは文章をうまく書きたいと願っている生徒が多い。そういった生徒の要望に対して塚本氏をお呼びし、現場の新聞記者による文章作成法を説明頂いた。あらかじめ塚本氏が指定した「マイ・ブーム」という題についてエッセイを書かせた。塚本氏にはそれらを事前にファックスで送信し、当日はそのエッセイをもとに講評をもらった。塚本氏は人に伝わる文章を念頭に置いて、具体的なエピソードを盛り込むことや書き上げる前にじっくり構想を練ること、書き出しを印象付けることで書き手の顔が見えてくることを説明された。次の感想は塚本氏と生徒の間でどんなやりとりがあったかを示している。

・お話を聴いて一番印象に残っているのは、文を通して自分を伝えることです。塚本さんの「自分ならこう書く」を聴いているとその様子が具体的に伝わってきて「ああ、確かに」と何回も感心しました。(授業で以前)良い文章とは何か、という議論をしたのですが、その時は〈読み手が読み進めたくなる文章〉と答えました。何となく、読み進めたくなる、だったのですが、今思うと読み手がリアルに情景を思い浮かべられ、書き手の人物像を想像できる文が〈読み進めたくなる〉んだなと気づきました。また「きれいに見えるから」と思っていた表現がかえって人物像を消してしまっている、ことは初めて知りました。変にきれいにするのではなく、ありのままの事実を書くことの大切さがよくわかりました。もうひとつ、大事だなと思ったのは、まとめ方です。いつもきれいにまとまっているように見せようとしていました。でも改めて「それを言いたかったの」と言われると「いや、そういうわけでは…」と思いました。一番伝えたいことでまとめる、というのは当たり前だと思っていたのですが、できていないのだなと気づきました。

・特に印象に残っている言葉は「君はそれを本当に伝えたいの？」です。私もいざ自分の意見や思ったことを文章化する時、いつも格式張った読みにくい文章や、何が伝えたいのかわからない文章になってしまうので、これからはその言葉を忘れずもっと自分らしく「こんな人なんだ！」と伝えられる文章を書いていきたいです。
・お話を聴いて「書く」ということについてすごくイメージが伝わってきて、とても勉強になりました。私たちが書くものはやはりリアリティがなくて、相手は書き手の人物像を想像できなかったりするけど、塚本さんの記事を読ませて頂いて、自然に目の前に情景が思い浮かんで、私もこんな文章を書けるようになりたいなと思いました。その現場を見ていない人に文字で情景を伝えるには、細か過ぎず、大雑把過ぎずキーワードを選んで書かないと、ひどい文章になって、結局何が言いたいかわからなくなってしまうのが難しいところだし、それが書けるようになるのは何回も文章を書かないと身に着かないことだと思いました。
・プロの記者に自分の文章を指摘されて、本当に自分の文章力はまだまだで、面白みがないんだなろうなと思いました。読んでもリアリティがなく、頭の中で情景が浮かんでこないとのことなので、自分の感情を文章にちょくちょく入れていきたいと思いました。動作の程度など様子も入れたらリアリティが増すと思いました。
・マスキングテープについて書いた者ですが、塚本さんのご指摘の通り、私が最も伝えたかったのは「安くて小さなマスキングテープも、塵も積もれば山となる」ということではありませんでした。自分で自分の文章を読み返して、始まりと終わりが繋がっていないことや、400字の字数制限の中、何とかまとめようとしたことが恥ずかしくなりました。マスキングテープの説明から始めたために、その説明に大幅なスペースを割いてしまい、自分の実体験や本当に書きたい、伝えたかったことが書けなかったのだと思います。大学受験で小論文が必要なので、箇条書きで自分が書きたいことのリストを作り、そこから文章を練り上げていけるように練習します。
・まさか自分の書いたエッセイが批評されるとは思っていなかったのでとても恥ずかしく感じましたが、採り上げられたことで、改善点が明白になったから良かったです。私は文章を書く時ついつい、思いついたことから書く癖があったので、まず自分の伝えたいことを考えて箇条書きしてみたいと思います。

Ⅳ．おわりに（まとめ）

（1）成果と課題

2012年6月に初めて塚本氏と授業を行って以降、国語という教科で新聞記者とどのような授業ができるか、可能性を互いに模索してきたわけだが、結果的に新聞づくり、インタビュー、メディア・リテラシー、学び方、文章作成法という5種類の授業を実践することができた。課題としては、基本的に筆者と塚本氏の2人で授業を構築してきたため、教科内での広がりがなかったことである。新聞づくりは古典講読、文章作成法は国語表現というように、単独で持たざるを得ない教科で実施したことも要因としてある。ただ、2013年のメディア・リテラシーについては他の2名の現代文担当教員と共有できたことは成果として挙げられる。

（2）可能性

5種類のうち、メディア・リテラシーはインターネットの普及やＳＮＳの浸透といった社会の様相からも、今後ますます必要となる力であり、この力をつけさせる重要性については、国語科教員の中でも意見が一致するところであろう。現場において年々生徒は、与えられたり、自分で獲得した情報を批判的に捉えることなく、鵜呑みにする傾向が強くなっていることを感じる。メディア・リテラシーは塚本氏と行った授業の中でも、他の教員とも共有しやすく、新聞社の特性を生かしながら、今後効果的な協同授業の方法が模索できる分野であるといえ

る。

（３）記者の人間力

これまでの一連の実践の成果は「塚本宏」という一人の新聞記者の人間力に負うところが大きい。20時間も協同授業ができたのもパートナーが塚本氏であったからである。生徒が惹きつけられ多くの学びを得たのも塚本氏の人間的魅力や新聞記者としての実力があってのことである。言論人としての批判的精神や反権力の姿勢を、氏が備えていることが根底にあるのは言うまでもない。もし相手が塚本氏でなかったら、いくら京都教育大学と京都新聞社で協定を結んでいようと、筆者はこれほどまでの協同授業を行ってはいない。さまざまな活動ができた第一の要因には筆者と塚本氏のコンビネーションの良さが挙げられる。そういう点では本稿での協同実践は「新聞を活用した」実践というよりも「新聞記者を活用した」実践と称すべきであろう。

2012年からの協同実践を通じて考えることは、新聞記者との協同授業で最も重要なことの１つは、そのやり方よりも、新聞記者にどれだけの人間的魅力や記者としての力量があるかどうかであり、教員側がそれをどうやって引き出すかである。教室に突然現れる記者が一人の職業人として、一人の大人として、一人の人間として、どれだけ生徒にインパクトを与えられるかによって、もたらされる教育効果は変わってくる。いくら授業の方法においてノウハウが蓄積されたとしても、言論人としての新聞記者にその魅力がなければ、全て「画餅」である。その観点からいえば、国語科教員と新聞記者の協同授業実践の広がりの可能性は、新聞社側が、生徒からみて魅力的な職業人をどれだけ育てられているかに大きく関わっているといえよう。

注

１）1960年生まれ。京都府出身。京都府立向陽高校、大阪市立大学を経て吹田市市役所職員に。約10数年前からイラクを始めコソボやアフガニスタンなどの紛争地を訪問し、募金や医療器具を届ける。2004年暮れに市役所を退職後、NPO法人「イラクの子どもを救う会」を設立し代表に就任。イラクから米軍の攻撃で傷ついた子どもの姿を報告、「市民の目線で戦争を伝えてきた」姿勢が、平和に関する優れた報道に贈られる「第12回平和・協同ジャーナリスト基金大賞」（2006年12月）の受賞につながった。取材した現地の生の情報を「報道ステーション」（テレビ朝日）や関西テレビ、毎日新聞など数多くのメディアに発表している。

２）山田悦子氏は1974年に西宮市で起きた甲山事件においての冤罪被害者である。無罪が確定するまで事件から25年、起訴から21年の長い歳月を費やした。本校では国語科の課外授業で有志を募って、毎年高校生模擬裁判選手権（日本弁護士連合会主催）に出場しており、その準備学習の一環として山田氏を招き人権について学んでいる。

参考文献

京都新聞　2012年6月27日朝刊「方丈記の一節に見出し」
2012年12月19日朝刊「インタビュー手法学ぶ」
2013年7月3日朝刊「メディアへの理解深める」
2013年11月8日朝刊「インタビュー技術学ぶ」
2014年12月4日朝刊「『なぜ学ぶのか』意義考える」
2015年7月1日朝刊「書き手の『顔』見える文章を」
2015年12月15日朝刊「インタビュー手法学ぶ」

札埜和男（2011）「『国語』としてできること」高校生活指導研究協議会編『高校生活指導』第191号冬季号（青木書店）pp.10-13.

札埜和男（2013）「国語科教育におけるインタビュー実習に基づく聞き書き授業の研究」『京都教育大学国文学

会誌』第四十号　pp.27-45.

謝辞

いつも筆者の無理難題に快く付き合っていただいた塚本宏氏に心より感謝申し上げます。楽しい授業を一緒に創り上げて下さりありがとうございます。

資料①　授業の様子を伝える掲載記事

（2017年2月3日付）

「情報うのみにしないで」

京教大付属高で授業　本紙記者語る

「事実と真実のちがい」などについて、記者の話を熱心に聞く生徒たち（京都市伏見区・京都教育大付属高）

記者による授業が2日、京都市伏見区の京都教育大付属高で開かれた。2年生が、情報を批判的に読み解いて活用する力である「メディアリテラシー」について理解を深めた。

京都新聞記者が、阪神大震災の取材経験を踏まえ、情報をうのみにしない大切さを話した。また、18歳と19歳の投票率の記事を用いて「数字は一人歩きしがち。恣意的に書かれていないかどうかの視点が必要」と語った。

生徒たちは「真実に迫るためには」の問いに、「複数のメディアから情報を仕入れる」「いろんな人から聴く」「自分の目で確かめる」などの意見を手元の白板に記していた。

授業は、京都教育大と京都新聞社が結んだ新聞教育推進協定に基づいて行われた。

付記

参考文献としてあげた京都新聞の記事は、京都教育大学附属高等学校研究部編『研究紀要』第90号（2017年3月発行）所収の拙稿「『国語科教員と新聞記者の協同授業実践とその可能性』資料編」に全て掲載している。併せて参照されたい。